

教員紹介

心理学専攻

» 教員データベース



向山 泰代 教授

心理学研究科長

研究分野 パーソナリティ／自己認知

研究テーマ 性格や自己認知の分野での個人差や個性の表現を、性格記述語や写真などを素材として研究

人が自分や他者についてどのように考え、言葉や画像を使ってどのように表現するのか、それらをどう測定し記述するのかに関心をもっています。例えば、性格検査の開発に携わったり、得られたデータをもとに性格の構造や対人関係における性格の機能を考えたりします。また、写真やインタビューでの語りに、その人らしさがどう表現されるのか分析します。

〈主な著書・論文〉

単著『自叙写真法による自己認知の測定に関する研究』（ナカニシヤ出版）／論文「自他の性格評定に使用可能な擬態語性格尺度の構成」（心理学研究）ほか

伊藤 一美 教授

研究分野 臨床発達心理学

研究テーマ 臨床心理学と発達心理学の2つに軸を置き、パーソナリティや家族関係について研究

幼児期に関して、家庭環境と学びとの関係について共同研究をしています。心理実践としては、統合的心理療法の立場をとり、家族をキーワードにひきこもり支援や医療現場での家族支援にも関わっています。論文指導では、家族関係や育児や青年期の不適応に関わるテーマを扱う大学院生の方が多いです。社会の変化も早いので、新しい研究方法や知見をともに学びつつ研究を進めています。

〈主な著書・論文〉

共著『思春期・青年期臨床心理学』（朝倉書店）ほか

尾崎 仁美 教授

研究分野 青年心理学／教育心理学

研究テーマ 大学生の学習意欲・学習成果に関する研究

大学生がどのように大学生活を過ごし、どのように成長していくのかということに関心があり、学習意欲や授業への取り組み、大学生生活の過ごし方、卒業後の進路や将来展望などについて、質問紙を中心とした研究を行ってきました。最近は、大学生の成長や学習成果に影響する要因について、学年差や個人差を解明するため、縦断研究や質的研究にも取り組んでいます。

〈主な著書・論文〉

論文「大学生におけるラーニングアウトカムの関連要因—大学1年次前期・後期のデータから—」（プシュケー）ほか

松島 るみ 教授

研究分野 教育心理学

研究テーマ 学習者の自律的学習態度を規定する要因やその方法に関する研究

大学生の学習支援に有益な知見を得るため、自律的学習態度や学業遂行におよぼす授業要因および大学生生活の要因について横断的・縦断的に研究しています。また、事前学習・事後学習の活用方法や学習内容を構造化させる様な授業方法について関心があり、大学生の学習方略遂行や授業理解を深化させる方策を検討しています。

〈主な著書・論文〉

論文「Relationships between Identity Achievement and Academic Motivation」(Psychological Reports)、「講義型授業における事前・事後学習と学習方略・授業への興味・理解度の関連について」（京都ノートルダム女子大学紀要）ほか

三好 智子 教授

研究分野 心理学的支援／青年心理学

研究テーマ 発達障害のある青年期の人たちの心理や支援

発達障害のある方が青年期につきあたる問題に、アイデンティティの問題と就労の問題があります。特に知的障害を伴わない方の場合、どうして自分は「普通」にできないのかなど、自分自身について苦悩することが少なくありません。また、能力にマッチした仕事を得られにくい現状も大きな課題です。こうした問題へのアプローチ方法を検討しています。

〈主な著書・論文〉

論文「イギリスのケンブリッジ大学Disability Resource Centreの取り組みから発達障害学生の支援について考える」（高等教育と障害）ほか

高井 直美 特任教授

研究分野 発達心理学

研究テーマ 言語・想像性・社会性の発達

乳幼児期の言語獲得、幼児同士の遊び、幼児期における「心の理論」・想像性の発達などをテーマとした、観察・実験・調査研究を行ってきました。最近は、子ども期から青年期にかけて「空想の友達」を作る経験が、青年のパーソナリティの形成とどのように関連するのかについて、調査研究を行っています。また共同研究で、家庭における親子の絵本との関わりが、幼児の発達にどのような影響を与えるかなどについても調べています。

〈主な著書・論文〉

論文「心の理論とふり遊びおよび言語発達との関連」(ブシュケー)ほか

村松 朋子 准教授

研究分野 心理学的アセスメント／心理療法の実証的研究

研究テーマ 心理学的アセスメントをベースとした多様な方法による心理療法の実践研究

“見えない心を可視化する”ことについて、一貫して興味を持って取り組んできました。臨床のアプローチとしては、家族支援や家族療法にも注力してきましたが、その際にも客観的データ(心理アセスメント、生理指標)を用います。学生には、経験則だけでなくエビデンスと合理性、科学性を持って説明できる力を身につけられるよう指導しています。

〈主な著書・論文〉

著書『心理療法を終えるとき』(北大路書房)ほか

